



墓地の鳥たち

佐佐木 邦子

お墓へ続く小径をたどっていくと、いろいろな鳥の
声が聞こえる。今の季節はとりわけウグイスだ。特有
のホーホケキョという美しい声から、ようやく鳴き方
を覚えたたどたどしいものまで、様々なさえずりが楽
しい。

ウグイスから始まって、ヒバリ、カッコウ、山鳩、
ホトトギス、鳥の声で季節が移っていく。墓地には鳥
が多い。自然がほどよく残っているせいだ、それだ
けではなく、お寺や墓地には鳥が群れるものだと昔か
ら決まっていたようなところがある。

人の魂を天へ運ぶためだ。古くからの信仰だった。
墓地には死者がたくさんいるから、魂を運ぶ鳥もまた
多くなければならない。死んだ当人だって、体は土の
下に埋められていても、魂は鳥とともに空を飛翔する
ほうが楽しいだろう。田畑や町並みを目の下に見て、
風と戯れながら高く高く飛んでいく。自分の家の上を
しばらく旋回して、悲しんでいる家族たちに、もう泣
くなと言ってやることもできる。

少し昔、軽々と大空を飛ぶ鳥は人の目からすれば不
思議で神秘的で、空と地上を自由に行き来する天の使
者のように見えた。カラスは人が死ぬ時期を知ってい
るとか、キジが死の知らせに行くとか、いろいろな言
われ方をすることもある。

土葬が一般的だったころ、葬式のととき紙で鳥を作っ
た地域は少なくない。霊柩車が今のようなスマートな
形になる前は、金ぴかの鳥が飾りに付けられていた。
鳥が魂を運ぶと、最近まで伝えられていた名残である。

鳥が飛ぶことに神秘を感じた民族は、世界のあちこ
ちにいる。それに加えて日本人は、鳥にも人のような
心を見た。死んだ父親を崖っぷちに埋め、墓が流され
るのを心配して雨が降ると鳴く山鳩。くちばしで弟の
腹を突いて殺し、後悔して喉から血を流して鳴くホト
トギス。そうかと思うと、お日様にお金を貸したが返

してもらえないので、「返せ返せ」と催促に行くヒバリ
の話のようなものまである。お日様めがけて真っ直ぐ
に昇っていくヒバリの習性から出た昔話だ。カラスが
人の死を予言するとか、ツバメが魂をすくい取るとか
も、みんなその鳥の習性からきている。それだけ日本
人は鳥を身近に知っていたし、身の回りの自然と親し
かった。

墓地は町なかでも鳥に出会える数少ない場所だ。最
近はお墓に供えた食べ物は持ち帰るようになったけれ
ど、少し前まで、鳥に食べられると、供えた者の心が
天に通じたとして喜ぶ風習があった。墓地を歩くたび
に、人を含めた大きな自然が目の前を動いているのが、
ありありと見える気がする。

2007.5 こもれび第3号